
イルカに降る雪

葵一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イルカに降る雪

【Zコード】

Z6514Y

【作者名】

葵一樹

【あらすじ】

彼と大喧嘩して一人ハワイに旅立った「あたし」。
奇しくもクリスマスイブに見つけたものとは。

バルコニーの白いガーデンチェアに腰かけ、あたしは大きくため息をついた。

見上げればどこまでも晴れ渡った青い空。眼下に広がる白い砂浜。空との境界線まで続く、ヒメラルドグリーンの海。

ビーチを行きかう人々の雑多な言語や笑い声が五階のテラスまで届く。ホテルの向かい側にあるショッピングモールからは、日本人にも馴染みのあるメロディが鐘の音と共に風に乗って運ばれてきた。嫌味を言われながらもようやく取つた年末前の有給休暇。吹雪が止まない地元から逃げるように、イブにハワイへ直行したあたしにとってこの旅行はココロ踊るバカンスのはずだったのに。

「……つたく。なーんでハワイ人は商売つ気がないかなあ」

常夏の島でマリンスポーツにショッピングに遊びまくるぞ、と意氣込んできたというのに。いざワイキキビーチに着いてみれば、ガイドブックに書かれたお店のどこもかしこもクローズの札がかかっているのだ。

聞けばクリスマス休暇でイブの午後やクリスマス当日はクローズのお店が多いとか。お店側も従業員にクリスマスボーナスを払うより、休みにしちゃつたほうがいいらしい。

「日本でイブって言つたら、ブランドショップもデパートも稼ぎ時じゃんつ」

唯一の楽しみが奪われて、あたしは裸足のまま軽くバルコニーの手すりを蹴飛ばす真似をする。すると、つんと当たつた拍子に、爪のラインストーンが外れて下に落ちてしまった。

ツイてない。

いや、思えば去年にこの旅行を企画したときから、あたしはツイてないことばかりだ。

まず昇進試験に落ちた。上司の犬に噛まれた。ピアスホールがか

ぶれた。そして風邪をひいてパスポートの更新にいげず、新規で取得し直した。

そして二ヶ月前。旅行の前金を払った直後、彼と大喧嘩をした。きつかけなんてもう忘れてしまうほどに些細なこと。でもお互いにヒートアップして、怒鳴りあいが止まらなくなつた。結果、どちらからも折れることのないまま、今日のクリスマスイブを迎えることになつてしまつたのだ。

あたしは頬につけた左手を少し浮かせ、親指で薬指の根元を探つた。でも何もない。手の平との境にある僅かなへこみが、数日前までそこにモノが存在していたことを無言で示しているみたいだつた。ふわりと風が舞つた。下ろした髪が頬を軽く叩いていく。遮るものがなくなつたせいか、そよそよと吹く乾いた風を薬指が敏感に捉えているのが分かつた。

十一月も下旬のハワイ。日差しは突き刺すように強いものの、日陰を通り風は穏やかで時に肌寒ささえ感じることがあるなんてはじめて知つた。タンクトップから出た肩に当たる風より、左手を掠めるそれはずつと冷たい。

えいとあたしは声を上げて立ち上がつた。

こうしていても仕方ない。到着してから何も食べていらないから寒いんだ。腹ごしらえができるお店を探しに行かなくちゃ。

エレベーターを降りてフロントの前を通り過ぎると、甘つたるいフルーティな香りがあたしの鼻を直撃した。人の動きに合わせてまとわりついてくるそれは、空気を重くするほどの甘さで、鼻腔を抜けて胸の奥や頭の芯までくらくらしそうだ。

空港を降りたときもそうだったつけ、とあたしはちょっとだけ息を止めてその場を通り過ぎる。

香水はキレイじゃない。けどやつぱりあたしはべたべたに絡みつく香りよりほのかに漂うくらいの方が好きだった。

彼も。

甘つたるい匂いから逃げたくて、あたしは記憶の中で彼の匂いを

探した。でもどうしてだろう。上手く思い出せない。すつと吹いてくる風があたしの左手を撫でる。ひんやりした感触が腕を這い登つた。

早足でしきりのないエントランスからホテルの外へと出る。さすがにワイキキのビーチ。有名店は軒並みクローズだったけどビーチに面したお店は大丈夫そうだ。

開いているのはどれも小さなお土産やさんとファーストフード店で、店番のおじさんやおばさんがカタログの日本語で話しかけてくる。値札もドルと円の一重表記。

そんな個人商店を物色しながらビーチに目を向ける。波うち際ではたくさんの人々が、それこそいろんな肌や髪の色をした人たちが楽しそうに水遊びに興じていた。

まだ足元がおぼつかない幼児を抱えたファミリー。見るからに日本人と分かるホスト風の男とその彼女。白い砂浜で真っ赤に肌を焼いている中年のオバサン。ヒゲを生やしたオジサンとちょっとマッチョな若者が顔を寄せ合ってひそひそ話しているのも見える。

じりじり焦げ付くような日差しの下だけどみんな笑顔で、その中であたし一人だけがぼんやりしているみたい。

この旅行だつて、本當なら彼と一人で来るはずだった。ちょっとしたモメ事はあつたけど順風満帆に付き合つてきつもりだつたし、毎年の冬に行つていたスキーを無理やりハワイに変更したこの旅行だつて、結婚を視野にいれてのことだった。

冬になると三度の飯よりスキーが良い、といつ彼もいよいよ結婚式をと考へ始めてくれた矢先だつたのに。

喧嘩の翌日、旅行会社から彼がキャンセルしたと聞かされて、あたしは意地になつて旅行を強行した。

「つまんないの」

意地になつて一人で来てはみたものの、やっぱりむなしさだけがこみ上げる。

沈んだ自分を引き上げるためにも、何かぱあつと浪費しよう。こ

うなつたらチープなものでもなんでもいいから買い物してストレス発散しよう。

手っ取り早く一番近くにあったお土産やさんに入ると、奥にいたおじさんが「ココ」しながら出てきた。別にどれを買うとも何も言つていいのに、「コレは一ドル、コレは一百円、などと日本語で話しかけてくる。あたしは断るのも面倒くさくなつて、適当に相づちを打ちながらゼットと店内を見渡した。

ウクレレ、マーメー、木彫りのマスク、ハワイアンジュエリー、椰子の皮製のストラップなど、雑多な品物が所狭しと置いてある。どれもこれも、いかにもハワイ。購買欲が湧かない。

「えくすきゅーず、み……」

出よう、としたそのときだつた。お店の棚の一角に、きらりと光るものを見つけたあたしの口が止まつた。

スノードームだ。

ハワイでスノードーム。なんともミスマッチな気がして、あたしはその中の一つに手を伸ばした。

波と戯れるイルカと、その周りに何故かパイナップルとかパパイヤとかの果物があつて、それ全体をガラスの球体が覆つている。そつと手に取つてひっくり返すと、中に沈んでいたラメがきらきらと水中を踊り始めた。

手の平に載せてあたしはじつとスノードームを見つめた。透明な球体の中の世界は、光が差し込む水中でイルカが泳いでいるようにも見えたし、水面に躍り出たイルカが舞い散る雪に戯れているようにも見える。

イルカの表情はどこまでも楽しく朗らかで、その目はどことなく彼に似ていた。彼がスキーの話をしているとき、スキー場で風のよう滑り降りているときのそんな目。

ふいに雪の匂いがした。

いや、それは氣のせいだつたのかもしれない。乾燥した風に含まれるのは、ホテルや空港で嗅いだのと同じく甘い香りだ。湿つて重

たい、空中の埃と水分が混じったような、あんな匂いがするわけがないのに。

でも確かにあたしの鼻の奥は、雪国で慣れ親しんだ初雪の匂いを捕まえていた。その匂いの記憶は南国の匂いに麻痺していたあたしの脳を搖さぶつて、初めて嗅いだ彼の匂いをも強烈に思い出させる。念入りに手を洗つたらしい石鹼の匂いと、少し焦げっぽい、灯油ストーブを焚いた匂い。それにほんのちょっとぴり混ざつたお味噌汁の匂い。

ああ、そうだつた。

「ソレ十ドル。十ドルディイヨ」

ぱうつとスノードームを持つたままのあたしに、おじさんが二コ二コと話しかけてきた。

あたしはバッグから十ドル札を出すと、おじさんにそのまま手渡した。包むかと聞くおじさんに首を振り、両手でスノードームを抱えたまま店を出る。アスファルトに炙られた風があたしの指先を撫でた。指輪をはずした薬指の声がはつきり聞こえる。

あたしはバッグの中から小さなポーチを取り出し開けた。ところどころ黒ずんでいるけど銀色に光る指輪を手の平に載せる。それを今にも暴れだしそうな薬指にはめた。ずしりと重い。けど心細さは消える。

「ハワイと日本の時差って、何時間だつけ」

携帯電話を開くとディスプレイに示される時刻は朝の六時。イブじゃない。二十五日、クリスマスだ。

クリスマスの朝は特別だもんね。

あたしは寝起きで不機嫌な彼の声を想像しながら、彼の番号を一つ一つ押していく。電話が繋がつたら何を話そう。何を伝えよう。怒られるだろうから、まずは謝るところから始めようか。

街に流れるクリスマスソングに後押しされるよつこ、あたしは最後のボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6514y/>

イルカに降る雪

2011年11月20日05時42分発行